



Title	島崎藤村『ある女の生涯』論：女の心身について
Author(s)	ホルカ, イリナ
Citation	阪大近代文学研究. 2012, 10, p. 36-48
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92679
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

島崎藤村『ある女の生涯』論

——女の心身について——

ホルカイリナ

一、はじめに

自伝に基づいた島崎藤村の小説では、一人の男性、あるいは男性の共同体が作品の中心に据えられ、登場する女性に恋愛対象または家族の一員といったいわゆる《脇役》の役回りが与えられることが多い。例えば『春』において岸本の叶わない恋の相手勝子があり、『新生』では、叔父と近親相姦関係を結んだ節子があり、また長編『家』において、夫を支えながら家系を守り、共にその没落を生きるお種がある。

女性を主人公にした数少ない藤村の作品の中、作者の姉・高瀬園子をモデルとしている『ある女の生涯』^①は発表当時から「氏の芸術が進むべき方向を暗示する」^②とあるように、藤村のその後の作品への期待が高まるきっかけとなり、以後の研究において高い評価を博してきた。

相続人の息子や夫に先立たれ、六〇歳になって養子夫婦と暮らしているおげんが、軽い知的障害をもつ四〇歳の娘お新を連れ

て、二人の最後の「隠れ家」を弟達のいる東京に求めて家を出る。しかし、一方で家の経済的な困難、他方でおげん自身の「身体の異状」に妨げられ、一時期養生していた峰谷医院で娘と別れた後、おげんは弟達によつて東京の養生園に入れられ、しばらくして根岸の精神病院に入院させられて死ぬ。『ある女の生涯』は以上のような内容だが、おげんが本当に《狂気》だったのか、彼女の《家出》の理由は何だったのか、小説において根岸脳病院での三年の滞在が描かれていないことはどう解釈すべきか、という数多い疑問点があり、様々な角度から論じられてきたのである。

例えば、《狂気》というテーマ設定の観点から『ある女の生涯』のおげんを『春』の青木と『夜明け前』の青山半蔵をつなぐ要素として解釈する論文^③や、剃髪したいと言い残して死んだ彼女の姿に《性》からの解脱を読み込み、「新生事件」以降の作者自身の姿を重ねる論文^④がある。また、青木の《狂気》の外側しか描かれていない『春』に対して、『ある女の生涯』においておげんの《狂気》の内側が描かれていると指摘し、作品化によ

っておげんの苦悶の人生が浄化されたと評価している考察⑤も挙げられる。あるいは、作者の実生活を視野に入れ、物語内容との差異に意味を見出し、おげんの《狂気》の有無についての新たな解釈に役立たせる論文⑥も注目に値しよう。

他方で、ジェンダーや家制度による束縛がおげんの《発狂》に与えた影響を、藤村の短編『涙』や『出発』、それぞれを補助線としながら論じた瓜生清「島崎藤村『ある女の生涯』論」⑦と関谷由美子「流浪する狂女」と「二階の叔父さん」——藤村『ある女の生涯』と『出発』——⑧といった考察もある。また、大正八・三・二七に制定された、精神病患者の保護治療を義務づける精神病院法という近代的な制度や、科学・医療法が進んでいる外国から帰朝したばかりの藤村の態度⑨、あるいはこの時代に論争されつつあった母性保護・女性解放運動や、様々な文献と活動を通してその中に身を置いていた藤村の態度⑩、言い換えれば時代背景と作者の問題意識の統合の産物としての『ある女の生涯』に焦点を当てた論⑪も挙げられよう。

本稿では、おげん像の構成に重要な役割を果たしている《狂》や《性》についての従来の考察を念頭におきながら、彼女の《異状》の真相、「隠れ家」への執着や、彼女の言う「女の破産」の意義を再検討してみる。考察の際、おげんの妻としての《失敗》だけでなく、テクスト中に詳しく記述されているおげんの母親像、換言すれば彼女が「一生の仕事」としている娘お新の世話や二人の関係にも焦点を当て、心身の上では何らかの《欠

陥》をもっている二人の女性と社会との関わりについて論じたい。

二、おげんの「異状」

『ある女の生涯』のおげんは、『春』の青木・岸本や『夜明け前』の青山半蔵を含む藤村作品における《狂》の系譜にありながら、同時に《性》、《老い》、《女》という要素もテクストに書き込まれており、他の藤村作品に描かれている《狂》とは区別する必要がある。他方で、おげんのモデルである作家の姉・園子は、「写しても写しても尽くせない」⑫人物であると考え、『家』のお種としても、『夜明け前』のお灸としても藤村の作品に登場しているが、『ある女の生涯』において主人公として中心的な位置を占め、その「生涯」に焦点が当てられていることも注目されよう。

本章では、まずおげんの《狂》や《性》、そして《老い》⑬といった要素と、それらが混合し相互作用している場としての《心身》⑭について検討していきたい。

作品の冒頭に近いところで、蜂谷医院の一室で早朝に起きたおげんが「明けかかつて居た」「夏の空」を見上げながら、家を離れ、自分だけの路を歩み出した瞬間が「漸く来た」と、希望に満ちた言葉を発する。その直後、「前の日に思ひ立つ、翌る日は家を出て来るやうな、そんな旦那衆のやうなわけにはいかすか」／「そうとも」／「そこは女だもの。俺は半年も前から思ひ立つて、漸くここまで来た」といった自己問答が記されている。

誰にでもありそうな内的対話として捉えられる場面だが、「二人の人の会話のやうであるが、おげんは一人でそれをやつた」と続く語り手の説明が、精神上の異状を示唆しているのである。「内部にはこんな独語を言ふ二人の人が居る」と繰り返して強調される病的な言動以外にも、「恐ろしいものが俺の方へ責めて来る」という妄想などもおげんの「異状」を物語っている。また、小山家では「家の人達から警戒されて、刃物といふ刃物は鉢から剃刀まで隠された」という事実から、あるいは「自分ばかり気の確かなつもりのおげんでも、これまで自分の為たことで養子夫婦を苦しめることが多かつた」という本人の気づきからも、「炭俵に火なぞをつけて、あんな垣根の方へ投つてやる」ような、自分や周りの人に危険を及ぼしかねない行為は頻繁に起こっていることが推測されよう。

おげんの精神状態について、「桑畑を焼くやうな失策」は「気の迷ひ」から生じたものであるという彼女の言葉や、養生園の庭から聞こえてくる蛙の声を真似しているうちに「心は本物の蛙の声の方へ行」き、「憂鬱」で「悩まし」い気持ちになった時に、「何だか俺はほんとに狂にでも成りそうだ」と、一方で異状を自覚しているおげんの姿が表される。しかし他方で「恐ろしいものが襲つて来た時の自分の反応を説明する際に「もうあんな恐ろしいものは居ないから、安心しよや。もうもう大丈夫だ」と言い、いかにも存在している「恐ろしいもの」の退治に成功したかのような口調になっており、また刃物を隠す親戚の警戒に「世の

冷たさ」を見るのみであり、自分の行動の危険性を自覚していないおげんも描かれている。

先行研究^⑤においてはしばしば、おげんが自分の意志で《家出》をし「もつと生甲斐のあることを探した」かったことが注目され、右に引用したような自覚・自己統御の瞬間が彼女の《狂》の否定に至らなくても、少なくともそれを疑問視できたための有意な条件として捉えられる。さらにおげんに《狂女》というイメージを押し付けるのは周りの人の無理解であり、好意的かつ安定した環境さえ整えられたら、自立して生活できたはずである、という見解もある。これらの論において、《自由意志》や《自己統制》がモデルの実生活上では確認できない側面であり、作者がおげん像に意図的に追加したことによって姉の苦痛と屈辱の生涯に救済の可能性を書き込もうとした、と指摘されている。

しかし、これらの場面を具体的に見てみると、いわゆる《自覚》の瞬間が《狂気》の一番著しく浮上する瞬間に並列させられることに気づくだろう。例えば次の二つの場面を見てみよう。

・「何だか俺はほんとに狂にでも成りそうだ。」（中略）どうして四十になつても独り立ちの出来ないやうな不幸な娘を連れていて——それを思ふと、おげんは自分を笑いたかつた。彼女はそこに置いてある火鉢から真鍮の火箸を取つて見て、曲げるつもりもなくそれを弓に折り曲げた。／「おばあさん——またここのお医者さまに怒られるぞい。」／と三吉は言つて、不思議さうにおげんの顔を見ていたが、やがて子

供らしく笑ひ出した。こういう場合に側にいるものの顔を見比べて、母を庇護おうとするのは何時でもお新だった。

・「こんなに大勢弟が揃つていながら、姉一人を養へないとは——呆痴め。」／彼女は思はず自分の揚げた両手がある発作的の身振りになつて行くことを感じた。弟達は物も言はずに顔を見合せていた。／「これは少しおかしかつたわい。」／とおげんは自分で言つて見て、熊吉の側に坐り直しながら、暈眩心地の通り過ぎるのを待った。金色に光つた小さな魚の形が幾つとなく空なところに見えて、右から左から彼女の眼前に乱れた。

これらの場面において、自分が「おかし」く、「狂」になりそうだと自覚するおげんが描かれるとともに、その精神の「異状」が身体を通して外部へ浮上することを抑えられない彼女の姿も表されている。おげんがコントロールできない行動自体は「曲げるつもりもなく」「真鍮の火箸を折り曲げること、あるいは「思はず」「発作的に」両手をあげたりすることに過ぎない。が、誰にでもありそうなこれらの行動がおげん自身によつて「狂」として意味づけられる一方、語り手によつても居合わせた人たちの反応が説明され、その「異常性」が強調されるのである。医者に怒られるという幼い孫からの注意、「側にいるものの顔を見比べて、母を庇護おうとする」娘の態度や、「物も言はずに顔を見合わせていた」弟達について言及があることによつてこそ、自己一貫性の欠如に悩まされ、「異状」を見抜かれたおげん像が造られてい

くのである。

さらに、『ある女の生涯』の主人公を形成する重要なものとして、〈性〉にまつわるいくつかの要素があるが、以前には性欲の抑圧が彼女の性的妄想につながり、〈狂〉として現れていると論じられてきた。しかし、おげん像の構成において〈性欲〉だけでなく、〈性病〉、あるいは〈遺伝〉や〈女性〉・〈母性〉も重要な役割を果たしているのだ。

そこでまず取り上げたいのは、女に弱い夫から移された「病毒」の問題である。「見ず知らずの女達から旦那を通して伝染」された性病がおげんの身体をはじめ、彼女の「命の根まで」を蝕む可能性を孕んでいる。それに気づきながら、おげんは自分の症状や、娘にまでも「深傷」を負わせた病氣について「家の人達にも、親戚にも、誰に向つても」嘘をつき、隠し通そうとしている。ここでは「旦那の恥を明るみに持出すに忍びなかつた」ことが理由として挙げられながら、同時におげん自身の性病にかかっていることの〈恥〉も示唆されているのだ。つまり、「見ず知らずの女達」と性交して感染した旦那の「恥」が、その旦那を許し彼の性交を通して病氣になった自分の恥ずかしい〈性〉による過失として意識されるのである。

また他にもおげんが〈恥ずかしい〉と思うものとして、「国の養子夫婦の睦まじさ」や「好い旦那を持つ」弟の娘への嫉妬が挙げられる。瓜生論^⑤では、おげんの養子夫婦、あるいは姪夫婦の仲に対する嫉妬やそれがもたらす〈恥ずかしさ〉は、一方で婦

徳に反するところから生じるとされ、他方で「性を抑圧すべきものと見做す考え」にも関わっているとの指摘がある。だが、誇らしく「養子の噂をする何でもない娘の言葉までが妬ましく思はれ」ることや、「睦まじさ」、「良い旦那」といった、仲の良い夫婦のイメージを含意している表現から、このような場面では生々しい(性)への無意識的な欲望より、自分が味わうことができなかった、また娘お新にも味わわせることができない、良い夫婦関係への熱望が表されていると考えた方が妥当であろう。さらに先行研究では、「病室に眼が覚めて見ると、生命のない器物にまで陰と陽とがあつた」といった文章もおげんの(性)への執着として解釈されている。しかしここでの「陰と陽」こそ、調和的かつ相補的に存在し、完成されるためにお互いを必要不可欠とする、おげんにとつての理想の男女(夫婦) 仲への憧憬を示唆していると考えられよう。

次に、おげんが蜂谷先生の「代診」として紹介された若い医者には「好い男だ」と思い、その「眼付のすずしい若者」に惹かれたエピソードについて述べよう。以前に東京に来た時、弟達に対して「後家と言つてもらうまいぞや」と威を張つて、色気について「あるぞい——うん、ある、ある」と主張していた彼女がここで「大急ぎでその廊下を離れて、駆け込むやうに自分の部屋に戻り、「堅く堅く障子をしめ切つて置いて、部屋に隠れ」たと、蜂谷の代診の男らしさの前に動揺していることが描かれる。別の場面では、庭掃除をしている男の「落葉を掃きよせる音の中にす

ら、女を欺しそうな化物を見つけ」たりすることから、おげんには、(性欲)の陰が漂っていることが確認できよう。同様に、養生園にいる「三十五六ばかりになる立派な婦人」と自分の妄想である「白犬」の間に『八犬伝』で読んだような性的関係が存在していると想像し、どんどん「女の徳までも平気で破りに来ようといふ」、「人間の淫蕩の秘密を覚えた」犬のことを怖れるようになることも、おげんの性に対する激しい反応を示しているのである。

しかしここでもう一つ着目しなければならないのは、これらの場面において書き込まれる(老/若) という二項対立である。例えば、代診が紹介されるエピソードは全部で五つの文からなるのだが、その中に「若者」という言葉が三回も使われており、さらに「初々しい」や「卒業したばかり」といった、若さを連想させる表現も一回ずつ使用されている。また、入院中の「奥様」についても若さの証としてのつやのある髪の毛が強調され、おげんの(若さ)に対する執拗な思いが垣間見えるのである。一方で彼女が養子の嫁をはじめ、「蜂谷の細君」、弟の連合いのおさだなど、様々な「女ざかり」の女性と仲が悪く、これらの健全に生活を営んでいる人達を「皆、化物だ」と罵っているということにも着目すべきであろう。若者に対する「恥ずかしい」妬ましさの裏側に自分の(老い)を受け入れられない事実があり、それを物語る一番印象的な場面は以下に引用した箇所である。

思はずおげんは唸るやうな声を出して自分の姿に見入つた。

彼女が心ひそかに映ることを恐れたやうな父親の面影のかはりに、信じ難いほど変はり果てた彼女自身がその鏡の中に居た。／「えらい年寄りになったのだぞ。」／とおげんは自分ながら感心したやうに言つて、若かつた日に鏡に向かつたと同じ手付で自分の眉のあたりを幾度となく撫で柔げて見た。／「ひどいものぢやないかや。何だか自分の顔のやうな気がしないよ。」

ここで、刃物を隠され、親戚に警戒されていたことに思いを巡らしたおげんは、発狂のため「晩年を暗い座敷牢に送つた」自分の父親の姿を胸に浮かべ、その《狂》の面影を自分が映る鏡にも見えるのではないかと恐れているが、鏡に映るのは「信じ難いほど変はり果てた彼女自身」の姿である。小山家の人達の態度から連想させられた父親の精神上的の病はこの時点で後景に追いやられ、年寄りになったという身体的な衰えに焦点が当てられる。そして、時の流れを物語っている眉を「若かつた日」と「同じ手付」で撫で柔げる行動から、おげんにとって《老い》は受け止めにくい事実であることが確認できよう。

さらに、おげんの《老い》に対する態度を象徴するものとして、彼女の眼を通した直次の養母（おそらく自分と近い年齢の人）の描写がある。東京に着いた口には様々な親戚に会い、その中に「まだ達者で、頭の禿もつやつやしていて、腰もそんなに曲げているとは見えなかつた」と、養母の壮健な姿についてのおげんの印象が表されている。そしてその後、年の割に髪の毛もつやつ

やして、腰も丈夫な「年をとつても髪のかたちを気にするやうなおばあさん」は「恐ろしい洒落者」と批判され、若作り（《老い》のいささかな隠蔽）をしようとしているその努力が「化物」の仕業として解釈される。若い夫婦の睦まじさへの嫉妬やそれに対する後ろめたさが表されている段落において養母の若作りへも言及されることで、一方で若い自分を取り戻せないことへの絶望、他方で自分の異状・衰えの隠蔽さえ不可能になったことへのおげんの苛立ちが示唆されているのである。

おげんは自分の「異状」の原因を夫から感染した性病に求めているが、テキストに書き込まれている諸症状はモデルである藤村の姉にくだされた《分裂症》という診断¹⁵と対応している。現在の医学的な研究¹⁶で分かつたことだが、女性の場合は、更年期に伴うエストロゲンの減少が分裂症の開始を促し、あるいはその症状を悪化させることがあるという。つまり、おげんの思い込みや当時の認識がどんなものであると、おげんが《狂》の状態に陥つた理由は、《女性》としての《性》にある可能性を否定できない。先行論においてもおげんの《狂気》がしばしば彼女の《女》であることに結びつけられてきたが、家制度の中に身を置かなければならない女性の《禁欲性》や《性の抑圧》が考察の焦点であった。他方で、発狂して死んだ父親の影に着目し、おげんの病因は遺伝子にあるという考察も、あるいは社会的な要素と遺伝的な要素が同時に発病の原因になっていることも指摘されてきた。しかしおげんの心身上に交差しているのは、《血縁》にまつ

わる問題や、女性が社会から受ける〈性の抑圧〉といった問題だけでなく、更年期障害による分裂症の誘発・悪化の危険性、言い換えれば〈老い〉が〈女〉の体にもたらしうる〈狂〉という「異状」も挙げられよう。

そこで、『ある女の生涯』において描かれている〈狂〉は、『春』の青木や『夜明け前』の半蔵のとは異なる、〈女〉に特有なものであると考えられるため、次章ではおげんにとつての〈女〉であることに着目してみよう。

三、「そこは女」であるおげんと

「あれも女」であるお新

若い女性（あるいは若作りが上手な女性）に対する嫉妬や若い男性への性欲望、そして夫に感染させられた性病とそれに触まれる身体、あるいは自分の「変はり果てた」「ひどい」老いた姿などは、おげんにとつて〈恥ずかしい〉、隠したいものである。そして、興奮・妄想・震えなどの症状を隠しきれなくなり、小山家において刃物が隠されるようになったことが、おげんの「隠れ家」を求める理由になるのだ。言い換えれば、〈老い〉や〈病〉が〈恥〉や〈屈辱〉として感じられ、〈隠蔽〉欲望につながるというえよう。そこで、自分と娘を隠そうとするおげんの行動に、〈女〉であることがどういう役割を果たしているのかを、テクストに沿って確認してみよう。

冒頭に近い箇所でおげんの「異状」を示す彼女の中の「二人

の会話」が表され、おげんが自分の家出と夫が生前に繰り返していた放蕩とを比べてみせる。妻や子供のことを考慮せず、芸者の誘惑に負けた旦那に対して、おげんは家を離れることを「半年も前から思ひ立」ったと言い、「そこは女だもの」と主張している。つまり、夫の軽率な振舞いとは異なり、慎重な考慮の上に行動に出たことが〈女〉だからである、という論理である。さらに彼女が「小山の家を出ようと思ひ立つたのは、必ずしも老年の今日に始まったことではなかった。旦那も達者、彼女もまだ達者で女のさかりの頃に、一度ならず二度ならず既にその事があつた」と回想している。家出を思い立つても実行しなかった理由として「旦那のことを思ひ二人の子のことを思へば」、「闇の枕」が「濡れない晩はなかつた」とあるように、子供の存在が大きかつたとされる。夫の他界後一度も鏡を見ていない〈女〉おげんにとつて事実上では〈妻〉としての役割が終了し、息子が死に、娘が四〇歳になっているので、〈母親〉の役割も期待されないはずであった。しかし、お新が知的障害をもっているために、おげんがその世話を続けなければならない。この現状について以下の引用を見てもよい。

「いえ、蜂谷さん、あれがあるばかりに私も持ちこたへられたやうなものよなし。ほんとにあれのお蔭だぞなし。あれは小さな時分からすこしも眼の放されないやうなもので、それは危くて、危くて、『お新、かうしよや、ああしよや』つて、一々私が指図だ（中略）。そのうちに、あなた、あれ

も女でせう。あれが女になつた時なぞは、どのぐらゐ私も心配したか知らずか。」(中略)「まあ、あれがさういふものだで、どうかして私ももつとあれの側に居て、自分で面倒を見てやりたいと思ふわなし。ほんに、あれがなかつたら——どうして、あなた、私も今日まで斯うして氣を張つて来られずか——蜂谷さんも御存知なあの小山のごたくの中、十年の留守居がどうして私のやうなものに出来すか——」

おげんがお新の養育を「一生の仕事」として見ているだけでなく、同時に娘は自分の「持ちこたへられた」、あるいは「今日まで斯うして氣を張つて来られ」た理由であるとしている。また右の引用において語られるもう一つの重要なものは、お新が「あれも女」であることである。知的障害をもつ彼女でも、時期が来たら初潮を迎え、身体の機能上では〈女〉になつたのだが、その出来事は母親のおげんにとって「心配」極まりないものである。「ごたく」している小山家の中、おげんは「十年も旦那の留守居をして独り闇を守り通した」だけでなく、「あれも女」であり、「処女で通させて来た」お新の世話をもしなければならなかつた。「最後の「隠れ家」を探しているおげんの熱望の裏側には「眼の放されない」お新を外界から守る必要性もあつたのではないだろうか。以下、「二人で心配してくれ」とおげんが弟達に一軒家を借りてもらふように頼んだ場面も引用しておこう。

「熊吉や、それは自分の娘でも満足な身体で、その娘に養

子でもした人に言ふことだぞや。あの旦那が亡くなつてから、俺はもう小山の家に居る氣もしなくなつた。それに、お新のやうな娘を持つて御覧。(中略)お前のとこの細君も、まだ達者で居る時分に、この俺に言つたことが有るぞや。「どんなに自分は子供が大勢あつても、自分の子供を人に呉れる氣には成らない」つて。それ見よ、女といふものはさういふものだぞ。そこだ——そこだ——それだによつて、どんな小さな家でもいゝから一軒東京に借りて貰つて、俺はお新と二人で暮らしたいよ。」

ここでおげんは「どんな小さな家」にでも住みたい理由として、「お新のやうな娘」を持つ親としての責任を挙げ、小山家において自分達の居場所がないことを主張している。前述の通り、機能的にお新の身体は〈女〉であるが、右の引用にあるように、おげんが娘の身体は「満足」ではないと述べている。要するに、知的障害はお新の精神の「異状」にとどまらず、「処女で通させて来た」、言い換えれば子供を産むことが許されなかつた彼女の〈身〉をも不「満足」なものにしてしまふ。また、熊吉の亡き妻の言葉を借りて定義されるおげんにとつての〈女〉なるものは、「自分の子供を人に呉れる氣には成らない」ものであることも注目に値しよう。この発言から、子供の有無、子供との接し方が〈女〉を決定づける要素であるといつたおげんの考え方が窺えよう。つまり、おげんが〈母子〉關係にこだわることは、彼女自身の〈母親〉というアイデンティティを保証するためでありながら、

《妻》や《母親》になれないお新の《娘》としてのアイデンティティを保証するための操作でもあることが重要であろう。

他の家族との関係についてだが、おげんは一人息子⁽¹⁸⁾の死を「相続人」の死として嘆くのみであり、彼との特別な思い⁽¹⁹⁾も愛情も語られず、彼の名前さえテキスト中に表されない。夫もまた無名で小説に登場し、おげんの夫への「恋しさ」はお新を媒介したものである。それとは違い、知的障害をもつ娘お新との関係が重視され、その中でも二人の身体的な親しさについての記述が示唆的である。例えば、「お母さんは横になるで、お前も勝手に足でもお延ばし。」とおげんは言つて、誰にも遠慮もない小山の家の奥座敷に親子してよく寛いだ時のやうに、身体を横にして見、半ば身体を起こしかけて見⁽²⁰⁾た、とあるように、おげんとお新の距離は近く、親子で無遠慮に触れ合い、同じ空間を共有することが二人の日常であるとされている。しかし、同時代にこのような親しさは、はたして一般的だったのだろうか。

親子関係の同時代的な事情についてヒントを与えているのは、明治期の修身・国語の教科書に挿入されている挿絵の構図における家族員の配置とその変化である⁽²¹⁾。具体的に言うくと、教科書の挿絵において大人と子供の距離が縮小し始めるのは二〇年代以降であり、体で触れ合ったり、一緒に横になったりする親子を描いた図像が挿入されるのは、明治二五年以降のことである。要するに、それ以前に親子関係が必ずしも身体的な《親しみ》に基づ

くものではなかったことが明らかであろう。また他方で、教科書の言説においては家族・親子の間の愛情・調和・親しみが最終的に忠孝一致につながり、母親が子供（とりわけ男児）に愛情と教育を与え、国家のための有為な人材を育てる「良妻賢母」のイメージへと発展したことも、先行研究において検討される通りである⁽²²⁾。しかし娘の知的障害が、明治期以前の田舎で教育を受けたおげんに時代を先取りする母子の親和の形を発見させる一方、二人の身体的かつ私的な自己表現を、明治二〇年代後半以降の教育における母子関係の公的な意義と政治性に収斂されないものになっているのである。

また、おげんは「自分で面倒を見てやりたい」という意思を表明しているが、反対に娘が母親をかばわなくてはならない場面も描かれている。例えば、「そんなに早く起きられては若いものが堪らないなんて、よく家の人に言はれる。わたしは隣の部屋でも、知らん顔して寝ている」とお新がおげんの早起きを弁護したり、また「母の曲げた火箸を元のように直そうとし」、「こういう場合に側に居るものの顔を見比べて、母を庇護おうとするのは何時でもお新だった」とあるように、「子供らしく笑い出⁽²³⁾すお新が、おげんの言動と行動を無条件に受け入れる唯一の人物として表されているのである。この観点からいえば、心身の上では何らかの《欠陥》をもっている二人の女性が相互依存関係にあり、お互いに必要としているのである。

しかし最終的におげんは「窓が深」くなる施設に入れられ、

自分の最後の「支へる力」すなわちお新から遠ざけられ、相互依存的であった親子の關係が崩壊させられるのである。彼女は死ぬまでの三年を精神病院で過すが、この期間は作品に描かれていない。この空白の前に、おげんが父親に対して発した言葉と、娘との別れを嘆いた、以下の場面が置かれている。

「お父さま——お前さまの心地は、この俺によく解るぞなし。俺もお前さまの娘だ。お前さまに幼小さい時分から教えられたことは忘れないばかりに——俺もこんなところへ来た。」（中略）／最早、娘のお新も側には居なかつた。おげんは誰も見ていない窓のところに取りすがつて、激しく泣いた。

つまり、お新との別れによって、おげんが「一生の仕事」としていた《母》の役割が無効にされ、また、夫への「恋しさ」の媒体としても機能していた娘が「側に居な」くなることで《妻》の役割につながる唯一の《架け橋》も寸断されてしまう。そうして、小山家に嫁いであら送った長い年月の《痕跡》がすべておげんの周りから消えた後、彼女には自分の父親の《娘》という役割への回帰しか残されていないのだ。

四、おわりに

ジェンダー研究^⑩ではしばしば、近代において女性性は「生殖器へと一元化」されたとの指摘がある。医学的な言説においても、そして文学的な言説においても、女の心身上に起こる様々な《異

状》が生殖機能のアンバランスや感染によるものとされ、女の《性》に関わる要素が病理現象として解釈されていたという。また、日本において様々なたちを取りながら唱えられ続けた「良妻賢母」といった国家体制が、女の性欲を産む力に収斂させ、《家》に従属させることで、抑圧の装置として働いていたことも既に指摘されている通りである。

『ある女の生涯』についての先行研究においても、おげんが陥っている《狂》の状態の重要な一因として、夫に見捨てられてから永年「独りの闇を守り通した」こと、言い換えればその抑圧された性欲が挙げられる。例えば、関谷論^⑪では、「この小説は《隠れようとして隠れられなかった女の物語》なのである」とされ、おげんが秘められなくなっているのは、その「性的コンプレックス」、「性的抑圧」であると論じられている。『ある女の生涯』は確かに《隠蔽》の物語であると頷くことはできるが、おげんが秘匿したい事柄は必ずしも性欲に収斂されるべきではなく、《老い》による心身の衰えや、「旦那への恋しさ」と「旦那の恥」といった矛盾を孕んだ娘お新の存在も彼女の隠蔽行為につながっていると考えられる。「色気」についてはおげん自身が「あるぞい——うん、ある、ある」と弟の揶揄に答え、その挑戦的な態度には自分の欲望を隠そうとする影は見受けられない。さらに、蜂谷医師の診察の前に鏡を久しぶりに見ようとするとおげんには媚態も認められ、代診の医師に会った時に慌てて自分の部屋に逃げて行ったのは、「好い男」だと思った人に自分の老いた姿を見せ

たくなかったからであるといえよう。そして養子夫婦や姪夫婦の仲睦まじいことに対するうらやましくて恥ずかしい気持ちこそ、先行研究^⑤に言及される「性的妄想」によるものではなく、彼らの若さや仲良さがおげんにとって既に再現できず、また娘を通して代理的に味わうことさえできないものである、という認識に由来しているのだ。

他方で、娘の知的障害の原因という自分と夫の〈恥〉を秘めながら、その心身を守ろうとしているおげんも、お新によって様々な失策をカバーしてもらっている。二人は「勝手に足でも」延ばしたり、「親子してよく寛いだ時のやうに、身体を横にして見半ば身体を起しかけて見」たりしながら、「親しい感覚」を味わい、また互いの〈欠陥〉を隠しているのである。お新に対する責任感だけでなく、こういった相互依存的関係もおげんに二人の「最後の「隠れ家」」を求めさせる一方、別れに伴う親子の有機体の崩壊がおげん自身の崩壊を促しているのである。

タイトルの「ある女」という表現や大正期に藤村が女性解放運動に関心を寄せていたことを踏まえ、おげんの生涯はその時代の女性達の奮闘を代表するものであると論じた先行研究^⑥もあるが、知的障害をもつ四〇歳の娘と一緒に暮らしたい、加齢と分裂症に悩まされる母親といった設定は明治期前後の典型的な〈女性〉、〈母子〉、〈家族〉のイメージを連想させるものではないだろう。二人の親密な関わり方が互いに守り守られ、隠し隠される必要から生じ、〈家出〉や「隠れ家」の探求もおげんがお新の「面

倒を見」る必要、またお新が母親の「失策」を「庇護」う必要に裏付けられる。おげんとお新の「異状」が、同じ世代の人たちにはあり得なかった親しい関係を築かせる一方、考えられなかった〈家出〉、〈家からの独立〉という方法にも至らせ、要するに二人を同時代の社会的文脈や国家的イデオロギーの外側に配置し、特別に仕立てたのである。

弟の熊吉が、「姉さんにもああいふことがあつたら、そんなに苦しまずにも済むだろう」と言い、おげんにものを書くように勧めている。熊吉にとつて、言葉を通した自己表現は「苦し」みから自由になること、言い換えれば「苦し」みが言語によつて変装され、身体を離れて存在することを意味するのだ。しかしここで忘れてはならないのは、おげんにとつて自分の異状が「身体の異状」であり、また自分の〈狂〉の状態が実に〈老い〉と〈性〉の交差にある更年期や閉経による身上の変化に影響されていることである。さらに、おげんからすれば、お新が抱えている知的障害が彼女に一生の「処女」を強いてしまい、その「身体」を子供が産めない、「満足」ではないものに行っていることも見逃してはならない。つまり、〈女性性〉、〈老い〉、〈病〉のすべての側面において、自分そして娘をその身体性に還元させているおげんにとつて、精神上の苦痛を表現することを通して自分から切り離すといった救済手段は不可能であり、「俺は歌は読まん」と断言する彼女に自分の言葉は存在しないのである。そのため、「父が座敷牢

の格子のところで悲しみ悶へた時の古歌」といった他人の言葉を口ずさむが、彼女の最後の声・自己表現として印象づけられるのは、入院初日に「激しく泣いた」という身体的な表象であろう。

「牢屋敷」で死んだおげんの父親に「短い言葉で、不器用な言廻し」で書かれた歌、また『春』の青木に「若い時から書いた」「ツマラナイ反古」、換言すれば彼らの身体性に還元されない「霊的存在」の痕跡としての書物が存在し、忘却を回避する装置として機能している。しかし、家族によって精神病院に姿を隠された（あるいは〈おば捨て〉風に捨てられた）おげんは、空白としてテキストに表されている入院期間の三年が示しているように、その言葉が掬われないう限り、そのまま忘却されていく存在ではないのである。つまりおげんが経済的にも、また心身の健康状態の上でも家族によって管理される一方、彼女の言動や行動に外部的な状況説明を加え、あるいは逆に三年の出来事について沈黙し、「狂」という意味づけを誘導する語り手によって、その生涯の意義が操作されている。最終的に、テキスト中に描かれていない三年間の後、家族の許可無しで「頭を剃りたい」という自己表現もできないおげんが家制度に束縛され続け、自分の物語を獲得することなく、語り手の言説に閉じ込められるのである。

注

- (1) 「新潮」、大正一〇・七に掲載。
(2) 原田謙次、「藤村有島一家の近代を読む」（『東京朝日新聞』、大正

一〇・七・二八）。

(3) 佐藤泰正『「ある女の生涯」——『春』と『夜明け前』のはざまに——』（『解釈と鑑賞』平成二・四）。

(4) 和田謹吾『「ある女の生涯」——宿業の終焉——』（『国文学』昭和四六・四）。

(5) 伊狩弘『「ある女の生涯」論——狂気の内と外——』（『日本文芸論稿』平成一三・一一）。

(6) 小林幸夫『「ある女の生涯」——意思と自己統御——』（『解釈と鑑賞』平成一四・一〇）。

(7) 『福岡教育大学紀要 文化編』（平成六・二）。

(8) 『文学における性と家族』（佐藤泰正編。笠間書院、平成一一・四）。

(9) 大井田義彰「主題としての“狂気”——『ある女の生涯』論序説——」（『媒』六号、平成元・一二）。

(10) 例えば、大正一〇・六・一の「女性日本人」に載せられた文章「婦人の眼ざめ」（むしろ私は女性自身の内部に——本能と性欲に支配され易く見える女性自身の内部に、その深い眠りの源のあることを想像する。）や、大正一一年四月から翌年一月までに、「藤村全集」の印税を資金源に刊行された雑誌「処女地」等のような活動が藤村の婦人権運動・母権運動への関心を物語っている。

(11) 細川正義「島崎藤村『ある女の生涯』——おげんの生涯の意義——」（『人文論集』五一・四、平成一四・一二）。

(12) 島崎藤村、『春待つ宿 付記』（『正本版藤村文庫 第八編 昭和一

三・九)。

(13) 厚生労働省のホームページに掲載されている「第19回生命表、参考資料1「平均余命の推移」(<http://www.mhlw.go.jp/toukeisaku/nw/life/shu/gaiyoh.html>)」によると、明治初期の時点では二〇歳前後であった女性の余命は四〇、八歳であった。要するに六〇歳になったおげんが「老女」、「年高な女性」であり、五八歳で夫と死別し、六三歳で死んだ彼女のライフ・サイクルも厚生労働省のホームページ(<http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/11/dl/01-01.pdf>)に載っている当時の平均的なライフサイクルと一致している。

(14) 前掲書、注5、7、11の論文はこの点において類似した見解を示している。

(15) 前掲論文、注7を参照。

(16) 西九四方『島崎藤村の秘密』では、藤村の姉・園子の病氣も妄想型分裂症であるとされる(有信堂、昭和四一)。

(17) Goldstein J.M., Seidman L.J., O'Brien L.M. "Impact of normal sexual dimorphisms on sex differences in structural brain abnormalities in schizophrenia assessed by magnetic resonance imaging" (Archives of General Psychiatry, 2002, 15); Riecher-Rossler A., Hafner H. "Gender aspects in schizophrenia: bridging the border between social and biological psychiatry" (Acta Psychiatrica Scandinavica, 2000, 102)等を参考にした。

(18) 牟田和恵『戦略としての家族』(新曜社、平成八)にこの考察が

詳しい。

(19) 前掲書、注18、第四章「家族国家観再考」を参考。簡潔に述べておくと、明治初年の修身教育において広い意味での親族への孝が言及されていたが、明治一〇年代後半から二〇年代にかけて父母のみに対する孝が強調され、また親子の間の親しみへの言及が始まる。同じ時期に忠孝一致の言説も登場し、二〇年代なかば以降、天皇への忠が第一の徳とされ、他方で父母の愛や家庭の親しみ、そして国の父母としての天皇・皇后の慈愛が強調される時期であるという。

(20) 荻野美徳『ジェンダー化される身体』(勁草書房、平成一四)を参照。

(21) 前掲論文、注8を参照。

(22) 例えば、前掲論文、注7を参考。

(23) 川島秀一「藤村『ある女の生涯』の成立」(『日本文芸研究』昭和五五・三)はその一例である。

【付記】『ある女の生涯』からの引用は「藤村全集 第十卷」(筑摩書房、昭和四八)に拠った。ただし、ルビ・傍点を省略し、旧漢字は新字体に改めた。

(ホルカ・イリナ／本学大学院基礎工学研究科特任助教)